

研究全体のまとめ

研究部

令和6年度は、「全ての子どもが、運動の中心のおもしろさを十分に味わいながら、自ら運動の楽しみ方を創り出していく体育学習～子どもとともにめざす授業のゴールイメージの在り方に焦点を当てて～」を研究テーマに据え、小学校部会「パルクール広場でかっこよくまわろう～台上前転に挑戦しよう～」、中学校部会「跳び箱を障害物から演技をするパートナーへ」と共に跳び箱運動の授業づくりについて、ゴールイメージを中心とした「教材づくり」「授業設計」「教授行為」の3つの視点からアプローチを行った。この研究のまとめでは、その3点並びに、研究テーマにおける「自ら運動の楽しみ方を創り出していく姿」の各種目における具体について、小学校部会・中学校部会それぞれの研究のまとめから成果と課題について考察を述べていくこととする。なお、3点の成果と課題については、互いに関係し合っている部分もあるため、他の視点に関連した内容を書かなければならない点もあるが、より関係している視点に記載することをご容赦いただきたい。

(1) 教材づくりについて

小学校部会では、パルクールをメインの教材に据えた「台上前転」、中学校部会では単元前半に「共通課題『開脚跳び』」をメインの教材として、中心のおもしろさを焦点化、学習内容の明確化、アンケート等を用いた児童生徒の実態を踏まえた上で教材化がなされていた。両者共通して、「多様な技を個々の技能差にあわせて選択・追究していく」学習を仕組みがちな跳び箱運動において、扱う技を絞り込み、その技が「どの場でも・どんな条件でも安定してできる（小学校）」と「第一・第二空中局面を雄大に美しくできる（中学校）」といった技の追究に重きをおいた教材づくりであった。そのことが、本時見られた子どもたちの追究の深まりにつながっていたと考える。

小学校部会は「パルクール」という、子どもたちが「やってみたい」と思える場を設け、「怖い」印象をもつ子が多い跳び箱に対して、意欲喚起を図ることができた。また、それぞれのパルクールの場が、台上前転の下位教材となっている点も効果的であった。台上前転に内包されている運動課題を夏期合宿から分析し、教材づくりを図れたことが、本時見られた子どもたちの台上前転の習得度と、何度も粘り強く挑戦する子どもたちの姿につながったのだと考える。台上前転の運動課題について、本研究会では右図の3点に整理された。①③の項目は、一般的な授業でも大切にされて場づくりが行われていると思うが、本研究では②の課題を大切に下位教材開発が図られたことも大きな成果といえる。授業者の反省でも、「高い位置から安全な細いところを回る」場に手応えを感じていたように、『腰の高い位置で前転するイメージ』をどのようにつかませるか」を軸にして、各校でも自校がもつ教具から下位教材を設定することが大切になる。

【台上前転の運動課題】

- ① 着手した後、肩より腰をあげる
- ② 腰を高くあげたあと、後頭部をつけて回転すること
- ③ 細いところを落ちずに真っ直ぐまわって落ちること

中学校部会でも、開脚跳びの習得に向けて、「ロールマットの場」や「小学校用の跳び箱」などの、下

位教材の場が多く設置されることで、苦手な女子生徒も課題に向かおうとする姿が多く見られた。特に怖さや痛さを軽減するためのロールマットの場、第一空中局面での足の高さを強調したゴム紐の練習方法が有効であった。跳び箱運動については「高さを跳び越える機能的特性的な楽しさ」と裏腹な「高さに対する、固い跳び箱に当たったときの痛さ」をもっていること、自分の動きを「見える化」することを大切に教材化を図ることの必要性が示唆された。そういった点では、ICTの活用も効果的であったと言えるが、まだまだ使い方が不十分との記録もある。今回は生徒同士で撮り合うと言った手法をとっていたが、「再生遅延装置（追っかけ再生）」「タブレットスタンドの設置」「撮り合う時間の明示」など、子どもたちがより意図的・効率的・効果的に使用できるよう、教師の使いせ方や使い方の指導を検討していく必要があるだろう。

また、中学校部会授業者の反省でもあったように、上位生も「高さを求める跳び箱運動」にならなかったのは、跳び箱運動における正しい開脚跳びの知識として、「手をかいてより高い跳び箱をこす（モンスターボックス的）開脚跳び」ではなく「手を突き放す切り返し系の開脚跳び」が、教師と子どもたちで共有されていたからだろう。さらに、開脚跳びの運動課題のポイントとも言える、「第一空中局面の体の投げ出し」「第一空中局面と第二空中局面をつなぐ手の突き放し」といった感覚が強調されたロールマットの場やゴム紐の場が用意されていたことで、何度もチャレンジしながら「美しい開脚跳び」の実現に向けて粘る強い追究が見られたのだと考える。多くの技を扱ってしまうと、限られた時間の中、十分な知識や下位教材のもとで「技を追究する」学習の実現は難しい。その結果「跳び箱を跳びこす」といった克服型の跳び箱運動が生まれてしまっているのではないかと。本中学校部会の研究・実践を通して、中学生という発達段階や技能差においても、扱う技を絞り込んだ跳び箱運動の教材づくりをしていく大切さが示唆されたのではないかと。その点を踏まえると、「扱う技の系統性」を小中連携の視点として検討していく必要も出てくるだろう。

（２）授業設計について

小学校部会・中学校部会にともに、ゴールイメージに向けて、予想される子どもたちの動きを根拠とした授業設計を行なった。

小学校部会では、（１）でも示された、台上前転の運動課題に対応する、下位教材の場のつながりについて、右図の学習カードとして示し、それぞれの場でどのような動きができるようになっていけばよいかという手本動画を作成した。単元序盤では、その動画や学習カードを課題ごとに提示し、それぞれの場の使い方やその場で手本の動き（台上前転の動きのポイント）を生み出すためのコツを共有しながら学習を進めていった。授業設計段階に



台上前転の動きのポイント）を生み出すためのコツを共有しながら学習を進めていった。授業設計段階に

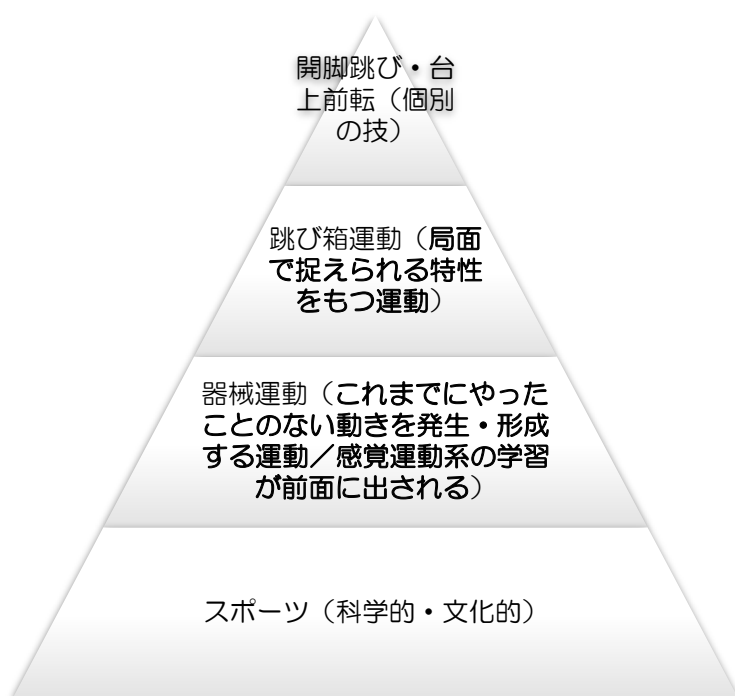
において、授業者の意向で「1つの課題を1時間ずつ丁寧に扱っていきたい」という思いもあり、本時（第5時）はそういった単元序盤を経ての学習であったため、子どもたちが自己の課題に応じて、場を選択し、取り組むような姿が見られた。学習カードや場を設定し、「あとは子どもたちが自分で学ぶことができる」と材を丸投げするのではなく、それぞれの使い方を丁寧に指導することで、子どもたちが「跳び箱運動の学び方」を学ぶ機会が保障されることが示唆された。

中学校部会でも同様の授業設計がなされていたが、授業分析や授業研究会記録にも記載があるように「生徒の意図した場の選択になっていない」「その場の正解の動きが理解できていない」といった反省が見られている。場が多様に用意されているだけに、それぞれの場の十分な理解が図られていく必要があった。一方で、今回箕輪中学校では、インターネット上に資料（右図参照）がアップされており、手本動画などが簡単に視聴できるようになっていた。中学生という発達段階であれば小学校のように全ての場を単元序盤で丁寧に扱わなくても、そういった



資料の充実により知識習得が促され、自身の練習方法の選択や出来映えの確認の手がかりとして活用していく可能性もあるだろう。そういった点については今後ICTの活用とセットで研究を進めていくとよいと考える。

また、小学校部会では授業設計段階において3つの課題においてどのような順序で指導していけばよいかということについて話題となった。岩田先生の講演の中でも、「跳び箱運動は局面構造で捉えられる特性（右図「学習内容の分化と統合」参照）」とおっしゃっており、本研究においても課題は局面ごとに捉えられていると言ってよいだろう。しかし、その局面を助走から順番に指導していくことが効果的であるかということについては検討の必要があるだろう。本実践では、①②③（1ページラインボックス参照）の順序で課題を指導していったが、授業者の反省からも、②の課題とそれに対応する場によって習得が進んだとの記述があり、単元序盤に②①③の順序で扱っていく方向性も考えられた。子どもたちの実態によって扱う順序が変化することも考えられる、「この運動のどこが一番の肝となるのか」といった点については今後も検討していきたい。



小学校・中学校部会共に言えることとして、基礎的感觉を養う「ドリル運動」の大切さが挙げられる。小学校部会では着手時の腕支持、中学校部会では体の投げ出し感觉の大切さが指摘されているが、そういった感觉は跳び箱運動のみならず、器械運動領域全般においても大切にしていきたい感觉である。今回のように下位教材によって強調されていくことはもちろん、小学校部会の準備運動段階にあたる「動物歩き」などのドリル運動を、子どもたちが「何のために行っているか」を理解していることが大前提として、単元を通して配置し、学年・運動種目（特に器械運動領域内）を越えて継続的・涵養的に育んでいく必要性を感じた。

（３）教授行為について

教授行為については、特に単元のオリエンテーション時に、教師が映像資料を交えながら、どのような発問等の教授行為を行うことで、子どもたちとゴールイメージを共有し、単元の見通しをもてるようにしていくか考えた。また、今年度は単元のオリエンテーションに留まらない、毎時間のインストラクションや追究中の相互作用行動や、ふり返りにおける学習カードの効果的な活用やＩＣＴの動画視聴のみに留まらない活用方法についても視野に入れて研究を進めた。

小学校部会では、はじめに「感觉言語」を用いた教授行為についてまとめたい。本時の追究時中盤に、授業者が意図的に全体指導を設け、できている子を示範にし、内的感觉を促す発問をしたことで、追究の後半への原動力となっていく。小学校部会の実践では、自身の出来映えを見取るＩＣＴの活用や意図的な協働的な活動を仕組まなかったため（その是非は別として）、「自分がどんな感じ（力のいれ具合やリズム）でやっているのか？」と十分に向き合いながら追究することができた。また、全体指導時に確認された着手時の「ギュッ」を手がかりに動きの変容も見られている。１つ課題として挙げるのならば、毎時間にクラスで見つけたそういった感觉言語やコツが、成果として蓄積されていなかったことだろう。本時を含めた単元後半に子どもたちが課題を見出し、場を選択していく際、外から見た動きのポイントだけでなく、クラスで見出した感觉やコツを手がかりにさらに追究が深まっていった可能性がある。

器械運動領域については、こういった「感觉言葉」を教授行為に意図的に仕組んでいくことの大切さが示唆された。講師の岩田先生はこういった内的感觉を引き出す言語を「比喩的言語」「擬音・擬態語」「リズム的表現」として整理している。今後、器械運動領域の教授行為については、この視点を大切に、研究を進めていく方向性も考えていきたい。一方で授業記録には『ギュッ』が活動を停滞させた」との記述も見られている。私たち教師が理解し、子どもたちと共有したいのは、こういった感觉言語は技習得のための「特効薬」ではなく、「〇〇君は『ギュッ』だけど、自分はどうなっているのだろう…」「自分は『グッ』って力を入れていたよ」「今まで手の力加減に意識を向けていなかったな…」といった自身の身体と内的感觉を通じて向き合うための「手立て」であるということも付記しておく。

中学校部会では、感觉言語をより活用していく教授行為について意見が挙げられていた。こういった点についても「器械運動の学び方」として、継続的な指導が必要となるだろう。また、中学校では生徒同士が感觉言語を手立てとして対話的に追究していく姿も期待していきたいと考える。一方で授業者の学習カードのコメントを手がかりに追究している生徒の姿も見られている。小学校部会におけるクラス内の成果の蓄積も含めて、本時内の教授行為はもちろん、次時につながるアドバイスや手がかりをどのように蓄積していくかといった点についても考えていく必要がある。

また、中学校部会の単元のオリエンテーションについては、比較動画を用いながら「本単元で目指す開

脚跳び」を明瞭に掴むことができていた。(1)でも触れた生徒の追究は、単元のオリエンテーションでの教授行為に起因するところが大きいだろう。また、(2)でも触れたインターネットサイトの活用を併せて進めていき、教授行為の一部を代替し、「いつでも」「どこでも」を実現していくICT活用の方向性も研究していきたい。小学校部会での単元のオリエンテーションについても、子どもたちの意欲喚起を促すには十分な動画作成となった。メイン教材が魅力的なだけに、台上前転への関心が薄まってしまうのではないかと危惧されていたが、その中で台上前転に着目し追究していくことができたのは、動画の撮影の仕方と、丁寧な発問計画によるところが大きいと考える。

(4)「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」具体的な姿について

小中学校それぞれの実践から、子どもたちの「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」具体的な姿について、授業記録や授業分析、授業研究会の発言等から明らかにしていく。

①小学校部会から

- ・練習場面での全体指導で、「手はギュっと着く」ということが確認された。それ以降せいかさんは、曲がることなく回転することができるようになった。「ギュ」という内感に働きかける言葉がせいかさんのできる姿に繋がったものと思われる。彼女なりの「ギュ」という着手の仕方が形成されたものと思われる。
- ・自身の技能向上に熱中する姿、友だちにアドバイスをしたり、アドバイスを求めたりする姿、成功したことを友だちと一緒に喜ぶ姿
- ・外的なポイントや自身の課題をしっかりと理解したうえで、練習の場や方法を選択し、試行錯誤した姿
- ・跳び箱を使いながら自由に動きを選択し、回ったり、跳んだりする姿
- ・真っすぐ回るための動きのポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもって試行錯誤する姿であり、友だちの「ギュ（っと手をついている）」といった感覚を示す言葉を手がかりに、自らの感覚をつかもうとする姿
- ・自分なりに場の使い方を工夫していた姿

②中学校部会から

- ・熱心に取り組んでいた。しかし技能のポイントと必要な練習方法がお互いに分からない様子だったこと、自己の運動感覚を言語化する難しさを抱えていたこと、動きを撮影するなどの運動観察の方法を選択できなかったことにより技能の向上がわからなかった。自身ができるようになる楽しさより、仲間の学習を援助する喜びに向かっている印象であった。
- ・1時間の中で1つずつの高さと着手の強さを調整しながら、最後の試技では足で着地することができた。「開脚跳びで縦の跳び箱を跳びたい」という強い願いと、「目線」など1時間の中で1つずつ課題を達成していったYさんの姿。

小学校部会・中学校部会の記述から、『『内的感覚』を手がかりに追究する姿』『自身で練習場所や方法を選択する姿』『それぞれの場や練習方法の中で動きを工夫したり試行錯誤したりする姿』としてまとめられるのではないだろうか。(1)～(3)を踏まえても、「教材づくり」「授業設計」「教授行為」それぞれの手立てによって、こういった姿が生まれることを、追究が深まっている姿、本時の成果としての姿として見取っていると考える。

また、令和4年度の学習指導研究会において、小学校部会マット運動の実践から「外的なポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもち試行錯誤する姿」が示されている。跳び箱運動においても同領域であることを踏まえ、前述した内容と照らし合わせても、およそ同様の内容であることが分かる。また、今回の研究会において（2）でも触れた、岩田先生からの跳び箱運動における特性についても、大切にしたい内容である。よって、跳び箱運動における「自ら運動の楽しみ方を創り出していく姿」について、「局面構造ごとの外的なポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもち、内的感覚を手がかりに試行錯誤する姿」とまとめてみてはどうだろうか。今後、器械運動領域の研究が行われる際には、この跳び箱運動の姿を手がかりに他運動の姿についても再考を図っていききたい。また、跳び箱運動においても、実践する際には、このような姿を目指して授業実践を行い、その成果や姿の是非について研究を積み重ねていきたいと考える。

（5）研究のまとめ

本年度の研究では、「器械運動領域跳び箱運動」を小中部会で扱った。小中共に同種目を扱うといった点から系統性や発達段階も踏まえた授業づくりを通して、研究テーマ「すべての子どもが、運動の中心的なおもしろさを十分に味わいながら、自ら運動の楽しみ方を創り出していく体育授業」に向けて実践を積み重ねることができた。成果と課題のまとめについては以下の表として示す。

	小学校部会（跳び箱運動）	中学校部会（跳び箱運動）
成果	扱う技を絞り込み、その技が「どの場でも・どんな条件でも安定してできる（小学校）」と「第一・第二空中局面を雄大に美しくできる（中学校）」といった技の追究に重きを置いた教材づくりの方向性	
成果	「腰の高い位置で前転するイメージ」を軸にした下位教材づくり - 子どもたちが「跳び箱運動の学び方」を学ぶ機会が保障された単元序盤の授業設計 「感覚言語」を用いた教授行為 - 子どもたちの意欲喚起を促す動画作成と丁寧な発問計画	「高さの怖さ、固い跳び箱に当たったときの痛さ」、自分の動きを「見える化」することを大切にしたい教材づくり - 跳び箱運動における正しい開脚跳びの知識理解と共有 「本単元で目指す開脚跳び」を明瞭に掴む比較動画 - インターネット上に動画等の資料がアップされており、簡単に視聴できる。
課題	- 学年・運動種目（特に器械運動領域内）を越えて継続的・涵養的に育んでいく基礎的感覚を養う「ドリル運動」の必要性 - 毎時間にクラスで見つけた感覚言語やコツ、次時につながるアドバイスや手がかりの蓄積方法	
課題	台上前転における時系列に留まらない局面ごとの学習順序の検討	感覚言語をより活用してく教授行為

本研究で見出した成果ならびに学習カードやゴールイメージ映像については、本研究会で積み重ねていくと共に、上伊那体育の日々の授業が向上されるよう、多くの学校や先生方へ広めていきたい。そして実践していく中で見られた子どもたちの姿から、さらに研究を深めていきたい。

また、令和2年度より本研究テーマを据えて見出されてきた「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」姿について、その具体を以下の表に示す。

年度	公開授業領域	「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」姿
R 元	小：ネット型連携プレータイプ 中：ネット型連携プレータイプ	自ら運動に向かおうとする姿、自分の力の高まりを実感する姿、友だちの高まりを認めたり、みんなで課題を解決したりする良さを学ぶ姿
R 2	小：ネット型連携プレータイプ	子どもが運動に夢中になって取り組み、「何かもっといい方法があるはずだ」と考える姿
R 3	小：ゴール型 中：ゴール型	「ゴールを生み出すためのパスに関わるボールを持たない時の動き」に関わる内容を探求していく姿
R 4	小：器械運動マット運動 中：ネット型攻守一体プレータイプ	→外的なポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもち 試行錯誤する姿 →「相手を意図的に揺さぶる」ことに向けて追究する姿
R 5	小：ベースボール型 中：ゴール型 (陣取りタイプ)	→「少ない失点にするための『どこでアウトをとるか』『そのために何をするか』の理想のプレイを共有・修正・実現していく姿」 →「ゴールを生み出すためのスペースを生かしたパスにつながるボールを持たない時の動きの追究」
R 6	小中：器械運動跳び箱運動	局面構造ごとの外的なポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもち内的感覚を手がかりに試行錯誤する姿

こうした姿を増やしていくことで、生涯にわたって運動に親しみ、その楽しさを味わっていく資質、能力を育むことが期待される。今年度までに見出された「自ら運動の楽しみ方を創り出していく」具体の姿について共有し、次年度の学指研の授業はもちろん、日々の体育授業における子どもたちの「ゴールイメージの姿」として参考にし、日々の体育授業の充実に向けて教材研究や授業実践を積み重ねていきたい。

参考：岩田靖「体育の学習内容探究」大修館書店 2024 年